



Title	Seeking Home and Safe Ground: Baseball Representations in Paul Auster and Don DeLillo
Author(s)	中村, 瑞樹
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96176
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (中 村 瑞 樹)

論文題名

Seeking Home and Safe Ground: Baseball Representations in Paul Auster and Don DeLillo
(安全な居場所を追い求めて—Paul AusterとDon DeLilloにおける野球表象)

論文内容の要旨

本博士論文は、アメリカを中心に発展してきた野球文学研究のさらなる発展に寄与すべく、これまで本分野において議論の俎上にあがってこなかった作家Paul AusterとDon DeLilloの野球表象の分析を試みるものである。野球文学研究は、文学研究のサブジャンルであり、その歴史も比較的浅いことから、研究の余地が多く残されている。本論文では特に、先行研究が扱ってきた作品が、野球文学のキャノンとも呼ぶべき、野球を主題とするものに偏っていること、そして、21世紀に出版された作品の分析が数少ないことに鑑み、上述の作家を取り上げ、先行研究の不足を補うことを目指した。AusterとDeLilloはともに専ら野球についてのみ書く作家ではないものの、彼ら独自の視点から野球を様々な場面で用いてきた。さらに、彼らは21世紀に入ってから精力的に作品を世に問い続けており、9/11テロ事件にも大きな影響を受けた作家でもある。そうした彼らの21世紀作品において、野球表象が果たす役割を考察することで、21世紀の野球表象の可能性を探ることも可能となる。これらを踏まえ、本論文では、彼らの作品内における野球表象は、作中に導入される様々なテーマを結びつける触媒やメタファーとして機能し、作品世界の構築において不可欠の存在であることを論証していく。

第1部では、AusterとDeLilloの作家キャリアの初期に当たる20世紀後半の作品の中でも、特に野球への言及が顕著にみられる、Austerの*Moon Palace*とDeLilloの*Underworld*に焦点を絞り、いかに彼らの野球表象が作品において不可欠であるかを探っていく。

第1章では、Austerの*Moon Palace*には、主人公Marcoの生き様を描くうえで不可欠な白球として、月・卵・野球という「3つの白球」があると仮定し、それぞれが独自の役割を果たしつつも、これら3つが有機的に絡み合い、いかにテキストを重層的に紡いでいるのかを精読分析する。これら3つの白球のうちでも、野球は孤児だった主人公Marco Foggの幼少期における叔父との良き思い出の象徴として彼を精神的に支えるだけでなく、父親探しの旅でもある本作において、父子関係構築の触媒として機能する。また、他の2つの白球が想起させるシンボリズムやメタファーと融合しつつ、有限のルールの中で無限の可能性を生み出す野球は、Marcoに予定調和に留まらない人生の幅広い可能性を意識させ、人生を多角的に捉え直すことを促している。さらに、結末までに3人の父と呼べる人物と死別するMarcoの様子を3アウトで新たなイニングに進む野球になぞらえると、本作は彼の人生の新しいイニングが始まる予感をもって幕が閉じていると言える。この結末は、変幻自在に姿を変える3つの白球さながら、Marcoの未来も無限に生成変化していく可能性も示しているのである。

第2章では、DeLilloの*Underworld*において、野球がアメリカン・イデオロギーの鏡として機能する様を概観するとともに、特に主人公Nick Shayが、本作を貫通するオブジェクトの1つであるBobby Thomsonによるホームランボールについて詳細に語る2つの独白部分を精読し、彼にとってこのボールがいかに自己内省の触媒として機能するかを探っている。Nickは、過去に暴発事故で人を殺めた負の歴史があることから、本塁打を被弾した敗戦投手Ralph Branca側の視点から、敗北の象徴、いうなれば「ルージング・ボール」として、このボールを所有していた。この独自の捉え方は、銃弾と野球ボールが共にshotという語で示されることにより得られたものと言える。一方で、年を重ねたNickはこのボールを美しいものと捉え直すなど、負の象徴にとどまらず、このボールに対する新たな解釈を生み出し続けてもいる。つまり、このボールは彼の人生のお守りとなるだけでなく、両親の鎮魂の記号にまで意味が拡大するなど、彼の混沌とした過去が収斂する対象として、彼の生きた証を残しているのである。

第2部では、AusterとDeLilloの21世紀作品に着目した議論を行っている。9/11とともに幕を開けた21世紀アメリカにおいて、ホームランド・セキュリティが脅かされるなど、国の本質が変容しただけでなく、こうしたアメリカの変化が彼らの執筆にも影響を及ぼしてきたことは、すでに多くの指摘がなされてきたことである。第2部では、彼らの21世紀作品の中から3作を抽出し、今世紀における野球表象の可能性を探っている。

第3章では、Austerの作家キャリアにおいて、21世紀に彼の野球表象が新たなフェーズに入ったとする仮定のもと、主人公Miles Hellerが両親への「ホームイン」を目指す物語である*Sunset Park*で、野球が果たす役割を分析している。まず、Austerの老いへの理解が深まった後に書かれた本作では、老いや死と野球が結び付けられるという、これまでにないアプローチがされている。例えば、Milesの父Morrisは、野球を通して、老いた父の視点から人生を振り返っている。また、生や若さの象徴とされる野球選手の老いや死に関する逸話が導入されることで、日の当たらない「小さな物語」に読者の意識を誘いつつ、21世紀の「もう若くないアメリカ」の現状が暴かれてもいる。さらに、9/11後のリジリエンスの象徴とも言える野球は、ホームレス問題を野放しにするような、沈んだアメリカに対する希望の光の1つとしても捉えられる。野球が持つホームインのナラティブは、結末でホームレスとなったMilesたち登場人物に対して新たなホームの可能性を提示するだけでなく、不況に喘ぐ21世紀初頭のアメリカが、合衆国が標榜する理想へと立ち返る必要性をも示すのである。

第4章では、ポスト9/11アメリカを生きる人々の複雑な心模様を緻密に描き出すDeLilloの*Falling Man*において、主人公Keithとその息子Justinがキャッチボールをするシーンの意義を検討している。ここでは、全速力でボールを投げ続けるJustinがピッチングマシンになぞらえられている。Keithがトラウマからの逃避行としてギャンブルを繰り返すように、Justinもボールという飛行物体を通して9/11の場面を再演するなど、彼らのキャッチボールには9/11の影が付きまとっている。その一方で、トラウマからの回復は直線的ではないことや、回復にはポジティブな感情の経験が肝要とする心理学的見地を踏まえると、彼らのキャッチボールは単なる機械的の反復にとどまらず、父子の良き思い出として、トラウマからの回復に寄与する可能性を秘めているとも言える。さらに、ホームインの物語構造や、犠牲を正式な統計として残すという野球の特徴を本作に敷衍すると、本作において9/11が21世紀アメリカ史を考察するうえで立ち返るべき場所として提示されていること、そして、テロの犠牲の上に成り立つアメリカのさらなる発展の可能性が示唆されていることが読み取れるのである。

第5章では、DeLilloの21世紀作品では、そもそも野球への言及自体が稀であることを足掛かりに、原因不明の停電により、ネットワークが切断された世界を描く*The Silence* において、アメリカンフットボールのスーパー・ボウルが言及される意義を、野球の特質と比較しつつ分析している。真冬の日曜に開催される一大メディアイベントであるスーパー・ボウルは、消費文化の象徴のみならず、戦争の昇華物として機能する。よって、当然視されていたメディアやテクノロジーといった消費財が失われ、ある登場人物の言によれば第三次世界大戦の具現化とも言える作品世界を描き出すうえでは、野球よりも相性がいいと言える。その一方で、デジタルテクノロジーが停止することで、「ホーム」なき世界と化した現状を語る人物の一人Jimは、彼の印象の中に野球帽をかぶった医師の姿が残っていることに言及する。メディア・スペクタクルであるスーパー・ボウルとは対照的に、この野球帽の医師は、彼が回帰を希求するアメリカの素朴な日常風景の代表であり、テクノ・ディストピアとも呼ぶべき異常な世界において、彼に日常生活を想起させる存在なのである。

結論部では、第1章から第5章までの議論を概観し、AusterとDeLilloの作品における野球表象の存在意義を再確認している。そのうえで、彼らの作品に野球表象が導入される意義のうち、最も顕著なものとして、野球が持つ「ホームへの帰還」という独特な目的が、「ホームへの帰還」というナラティブを導き出すシンボリズムとして機能することが挙げられると結論付けている。「ホーム」とは、自らの起源でもあり、旅立つべき場所でもある。さらに、帰還を目指す安全な場でもある。彼らの作品内における野球表象は、こうした「ホーム」という概念が含みうる多様な意味を、巧みに表出しているのである。彼らの作品に登場する人物は、さまざまな理由で「ホーム」から旅立ち、時に途方に暮れる。しかし、そうした彼らの葛藤の中で、懐かしい過去を呼び起こすとともに、一筋縄ではいかぬホームインへの苦悩の先にある新たな自己の可能性を示すメタファーとして機能するのが、野球なのである。AusterやDeLillo作品における野球は、20世紀作品では、どちらかと言えば登場人物の個人的な経験と密接な関わりを持つ。一方で、21世紀作品になると、テロにより国民の安全保障がままならない不安定なアメリカを生きる個人のみならず、国家に対しても、ホーム探求へのメタファーとして、アメリカが作り出すべき安全な場所を示唆する媒体としても機能している。このように、本論文で検討した野球への言及が含まれるAusterとDeLillo作品では、登場人物たちは彼らの新たな「ホーム」と「安全な場」を常に探求しており、そうした人物やアメリカという国家に対して、自己を更新しつつ新たな「ホームイン」への希望を提示するメタファーとして、野球は不可欠な役割を果たしているのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 村 瑞 樹)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	渡 邊 克 昭
	副 査	准教授	岡 本 太 助
	副 査	教 授	畑 田 美 緒
	副 査	教 授	中 村 未 樹
	副 査	名誉教授	貴 志 雅 之

論文審査の結果の要旨

本論文“Seeking Home and Safe Ground: Baseball Representations in Paul Auster and Don DeLillo”は、アメリカ文学における野球表象をめぐる先行研究において、互いに連関する視座より議論の俎上に載せられることのなかった二人の現代作家、ポール・オースターとドン・デリーロに着目し、彼らの作品に描かれた多様な野球表象が、いかに作品世界の構築に巧みに用いられているかを考察した上で、「ホーム」、もしくは「ホームへの帰還」という隠喩が登場人物たちの安全な居場所への探究においてどのような意味で鍵となっているかを、丁寧なテキスト分析を通じて鮮やかに炙り出した独創的な論考である。従来の野球文学研究がややもすると野球のゲームや選手を主題とする作品を主軸に展開してきたため、扱われる作品に偏りが見られ、研究のアプローチにおいても裾野の広がりや欠いていたという状況に鑑み、本論は21世紀の現在に至るアメリカの置かれた政治、社会、文化的コンテキストを踏まえつつ、一見見過ごされがちな野球への言及にも細心の注意を払うことにより、それらが様々なテーマを結びつける触媒としていかに機能し、新たな「読み」を導き出すかを実証的に提示している。とりわけ、9/11テロ事件によって大きな影響を受けたオースターとデリーロの21世紀に執筆された作品を取り上げ、野球表象が果たす役割を緻密に考察した部分は創見性に満ちており、高い評価を与えることができる。研究の歴史が比較的浅く、まだ研究の余地が多く残されている本分野において、本論文が学術論文の形式に忠実に則り、先行研究を十分踏まえた上で、テキストを的確に引証することにより、説得力をもって論証を進めていることは大いに評価できる。

序章では、アメリカを中心に発展してきたこれまでの野球文学研究が、専ら野球を主題とする小説に研究対象が偏っており、年代的にも裾野の広がりや欠けているという現状を踏まえ、これまで議論の俎上に載せられなかった現代作家ポール・オースターとドン・デリーロのテキストの随所に秘められた野球表象を丹念に拾い集め、一貫した視座より分析することにより、21世紀の野球文学の展望を探り出すという本論文の趣旨が明快に述べられている。

第1章「マーコと3つの白球ーポール・オースターの『ムーンパレス』における野球表象」では、主人公の生き様と深く関わる月・卵・野球という3つの白球がシナジー効果を伴って有機的に絡み合い、三人の父と呼べる人物と死別する主人公の父子関係や彼の人生の生成変化の触媒として、いかにテキストを重層的に紡いでいるのかが分析されている。やや牽強付会とも思える論の運びも一部において見られるが、本章の考察はまことに斬新で傾聴に値する。

第2章「敗北を握りしめてードン・デリーロの『アンダーワールド』における自己内省の触媒としての野球」においては、この長大な小説を貫通するボビー・トムソンが放ったホームランボールについて、主人公ニックが詳細に語る二つの独白を精読し、このボールがいかに彼の自己省察の触媒として機能するかを緻密に論じている。図らずも銃で殺人を犯した後ろ暗い過去をもつドジャーズファンのニックは、初老になるまで敗北の象徴としてこのボールをお守りのように慈しみつつ所有し続けることにより、それが含みもつ意味を自分の人生の諸相と絡めつつ更新してきたことが明晰に分析されている。

第3章「循環の先の希望ーポール・オースターの『サンセットパーク』におけるポスト9/11の野球表象」は、この小

説が主人公マイルズの両親への「ホームイン」を指向する物語であるとの読みに基づき、これまでになく老いや死との関わりにおいて表出するオースターの野球表象が、アメリカのホームランド・セキュリティが脅かされるポスト9/11の状況下において、日の当たらない「小さな物語」への導きの糸になっていることを緻密に論述している。サブプライムローン問題を背景として「ホームイン」を指向する本作が、ホームレスとなった主人公たちにとって新たなホームとなる可能性を提示しているという結論は独創的であり、本論文の要ともなっている。

第4章「キャッチャー・イン・ニューヨークードン・デリーロの『堕ちてゆく男』におけるポスト9/11の野球表象」では、9/11同時多発テロの生存者である主人公キースと息子ジャスティンが行うキャッチボールの機械的とも言つてよい反復性に着目し、トラウマから逃れるべくギャンブルを繰り返すキースと、トラウマに悩まされボールという飛行物体を通して9/11を再演する息子の複雑な心境を鮮やかに浮き彫りにすることに成功している。何気ない野球表象を抽出することによって、作中人物たちのトラウマからの回復の糸口を探ろうとする批評のアプローチは、先行研究には見られなかったものであり、評価に値する。

第5章「デリーロの『沈黙』におけるデジタルテクノロジーのスペクタクルに埋もれるアメリカの日常」は、原因不明の停電により、世界中のネットワークが切断された状況を描く本作において、アメリカンフットボールのスーパー・ボウルが言及される意義を、野球という補助線を引きつつ、比較スポーツ論的な手法によって分析している。真冬の日曜日に開催される一大メディアイベントであるスーパー・ボウルは、グローバルな消費文化の象徴のみならず、第三次世界大戦を彷彿させる戦争の代替的昇華物としても機能するがゆえに「宗教的」であるという考察は、デリーロの野球表象に込められた意味を逆に浮き彫りにするものであり、意義深い。また、デジタルテクノロジーの停止により「ホーム」なき世界に付む登場人物の一人が言及する野球帽をかぶった医師の姿に、「ホーム」への回帰を希求するアメリカの日常風景への憧憬を探り当てることができるという指摘は一見瑣末に見えるが、本論文の全体の論旨にも合致しており、一定の評価を与えることができる。

結論部「安全な居場所の終わりなき追求」では、第1章から第5章まで議論を進めてきたオースターとデリーロの作品に見られる野球表象論を総括し、野球というスポーツを何よりも特徴づける「ホームへの帰還」というゲーム上の目的が、国家や家庭や居場所といった多様な意味での「ホーム」への帰還というナラティブを比喩的に導き出すメタファーとして機能するという考察が、最終的に導き出されている。自らの起源でもあり、旅立つべき場所でもある「ホーム」が、帰還を目指す安全な場でもあるという本論文の視座は、非常にユニークであり、従前の野球文学論の論脈において類を見ない。オースターとデリーロの作品中に描かれた野球は、20世紀の作品では作中人物の個人的経験と密接な関わりをもっていたのに対して、21世紀の作品になると、テロにより国民の安全が脅かされる個人のみにならず、国家の安全保障に対しても、アメリカが目指すべき安全なホーム探求への手掛かりとして野球が前景化されるという分析は、先行研究の死角となっており、本論文の存在意義を際立たせている。

審査委員からは、「選手」、「ボール」、「試合」、「ホーム」といった、野球表象をめぐる多様な要素を俯瞰的に射程に収める何らかの文化論的枠組みを、イントロダクションにおいてもっと具体的に提示する必要があったのではないかと指摘があった。また、オースター文学とデリーロ文学に専ら焦点を絞ったことの必然性、並びに双方のテキストを扱った章における議論を有機的に結びつけ統括する視座があるのかについても質疑があった。これらの論点をめぐって活発な質疑応答が交わされたのち、本論文がどのような意味において、野球文学研究のさらなる発展に寄与しているのか、明らかにすべきだという提言が審査委員よりなされた。

しかしながら、こうした指摘は本論文の学術的価値を本質的に損なうものではなく、よくこなれた英語で執筆された本論文は、野球文学批評において鋭い問題提起を行った論考として高く評価できる。独創性に富んだ本論文からは、執筆者が、現代アメリカ文学・文化に関して広い視野と鋭い問題意識を有していることが窺え、アメリカ研究並びにスポーツ文学批評への寄与も顕著である。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。